
作家志望と文学少女

夕凧 渚 / 藤原 ゆきかぜ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作家志望と文学少女

【Nコード】

N9370P

【作者名】

夕凧 渚 / 藤原 ゆきかぜ

【あらすじ】

小説家を志す希一と、文学少女な礼佳。それに加えて漫画家志望の更紗。

夢を追う二人と、ただ本を読み続ける一人のお話——だった筈。

キャラクター紹介

大和田 希一【主人公】

髪長め。限られた人間の前でだけ、後ろ髪を結う。前髪で両目を隠すも、本人には見えている。

小説家を志し、毎日文芸部に持ち込んだノートPCで書き続ける。中学時代、引き籠りがちだったが、その頃から書き続けている。ちなみに、同時期に始めたブログは今も健在。

一人が好きだが、一人が嫌い。人間関係をリセットするために、遠い高校へ進学。

近藤 礼佳【メインヒロイン】

ブログで希一と知り合い、今では一番の理解者。

腰まで届く長い黒髪が特徴。

一か月で読む本が20冊以上と、並はずれた読書家。絵にかいたような文系。

長門 更紗【サブヒロイン】

何かと希一と礼佳を支える文芸部の部長。

部長だが、本当は漫画家志望。漫研の雰囲気と合わなかった、礼佳の監督——でこうなった。

いつもスケッチブック片手に絵を描いている。最近はイラストレーターも志す。

ちなみに、自他共に認める軍オタでもある。

室谷【名前のみ】

希一の友人。帰宅部が無かった＋人数合わせ（ ）で入部。現在は幽霊。

ハ。ヒで言う谷口ポジション。

人数合わせ

部の最低人数4名の為。

希一・礼佳・更紗は同じマンション。

・希一は人間関係リセットの為、遠くから来て一人で生活。

・近藤家と長門家は仲が良く、職業の関係上（ ）家に居ない両両親なので、礼佳と更紗は二人で暮らしている。

両親の職業

・近藤父、母は外交官

・長門父は外国航路貨物船の航法員。母は新幹線車掌（列車基地近くのアパートを借りている為に不在。

舞台

能都川町

- ・ 中央に鉄道が走り、駅を中心に東側、西側と呼ばれる。
- ・ 主に大阪や京都の会社に勤務する人間を対象としたベットタウン。

東側

- ・ 近年になって開発が進み、少し古い住宅地が広がる。古い商店街も存在。
- ・ 小学校と高校が一枚ずつある。
- ・ すこし住宅地を離れると、消防学校があり、田畑が広がる。
- ・ もう一つの山、和田山には旧日本陸軍が配備した15センチ高射砲の基部が残る。

1

西側

- ・ 発展が著しく、現在も住宅地が造られている。
- ・ 駅前には大型書店併設のスーパーがある。
- ・ 中学校と3つの小学校が存在する。
- ・ 近畿最大級の図書館がある。
- ・ 所々に古い集落が残り、西と北西部には未だ手の加わっていない集落が存在する。

- ・ 人が住む場所以外は基本的に農地。
- ・ 「伊庭内湖」には関西最大級の水車が存在する。
- ・ ” ” には旧日本海軍航空隊水上機基地が存在し、回天秘密訓練基地でもあった。

4

- 1 他にも複数の高射砲基部が残っている。
- 2 小学校は計4校。東西南北の名が付けられているが、必ずし

もその方角には存在しない。

3 能都川は水の町。水車とは切り離せない縁にある。

4 他にも試作水上機の試験も行っていた。湖の底からたまに廃棄された機体が見つかる。

1話 約束

ノートPCを閉じる。

「……………ふう」

「あれ？ 今日はまだ終わり？」

部室のテーブル。向い側に座る近藤礼佳が問う。

「あ、うん……。一日に決めた量を描いたから」

「そう。じゃあ、何か読む？」

鞆を持ち上げようとする礼佳を手で制する。

「今はいいや」

「ん。分かった」

鞆からペットボトルに入れた紅茶を取り出し、喉を潤す。

「で、何ページ進んだ？ 希一」

一番奥、窓を背にした席を陣取る漫画家志望、長門更紗が聞いてくる。

「5ページ強ってところ」

「そか—— 自分もがんばらんな」

そう言って更紗は持っていたスケッチブックを鞆にしまう。

「さて……。礼佳、帰る時間ですよ」

「うん。分かってる——」

と、更紗に声をかけられて返事した礼佳だが。

「……………」

視線は手元、小説に注がれたまま。

「近藤、いい加減にしとけ。長門がキレるぞ」

動かなければ、こう言えればいい。

さっきの受け流しはどこへやら。速攻でしおりを挟み、小説を鞆にしまう。

「……………まあ、いいか」

そして、更紗は本当にキレる寸前。

学校から、家——と言ってもマンションに向かう道。

更紗は商店街に買い物に行き、今は礼佳と二人。

「あのさ……。大和田くんが書いてる小説、最初に読ませたい人っているの？」

最初の読者——か。

「特に、決めてないかなあ……………」

「そう、なんだ……………」

じつと、食い入るように視線を飛ばしてくる礼佳。つまり——
|。

「最初に、読んでくれるか？」

ぱあっと、蕾が開いた花の如く、笑顔を見せ、大きく——。

「うんっ！」

普段から、何冊もの本を読む礼佳に読んでもらう——きっと、良い意見を貰えるだろう。

ただ——。

「完成するのはかなり先だけどな」

「あ……………うん」

2話 髪

さて、場所は変わってマンション。近藤宅。ちなみに、更紗は今さつき帰ってきました。

……。何かおかしい発言、と感じるだろう。

まず、近藤宅には更紗も住んでいる。二人の両親が仲良く、両親の仕事柄家にいない。この二つが重なり、現在二人がここに住んでいる。

そして自分。ちょっとした出来事から、実家から離れここで生活している。入居した時から近藤家に好くしてもらい、ただ一人の男手——と言うことで、もしもの時をお願いされた。

……。まあ、お隣さんじゃなかったら、どうなっていたか知らんが。

「なあ近藤、コンセント借りるぞー」

「あ、うん。どうぞー」

充電器をつなぎ、ノートPCを起動する。

「……………」

現在8ページ。規定量はこの十倍。規定量と言っても、それが最低 ではない。

「二人とも、カレーは辛くてもいいよね？」

頷きつつ、頭の中で文章を組み立てる。幸い、カレーと言うことは時間はまだある。

考えても仕方ない。ただ思いつくままに、文を書いていく。

「……………むう」

書き始めて数十分で煮詰まった。

……………。アレ？ 書いている間は気付かなかったが、どこからか視線を感じる。

更紗は台所。じゃあ、礼佳？ 礼佳は基本的に本を読んでいる筈。

くい、と視線を感じた方向に向き直る。

「ひい……………」

「……………なに？ 近藤」

「べ、別ににも……………」

視線の先に居た人物は、礼佳。珍しく、手に小説を持っていない。
「え、えと——あのね、髪を…………結んでないなって思って……………」

……………」

あ……………」。

「結んでるほうがいいか？」

少々自分は髪が長い。後ろ髪は肩を越している。

基本的には髪は結わない。人に見せて噂になりたくないし。

まあ、限られた人間——と言っても、今現在は礼佳と更紗だけだが…………」。

「えつと——どうだろ」

まあ、いいか。

腕に巻いていたゴムを外し、後ろ髪を一つにまとめてゴムで結う。
今まで髪で覆われていた場所が少し寒いが。もう一人の自分——
みたいな感じがする。

「もうすぐできるから、準備して〜」

「つと、了解」

更紗に呼ばれ、少し髪を弄ってから台所へと向かう——。

3話 一人は好きでも、寂しい。

二人に別れを告げ、隣の部屋——自分が借りている部屋に戻る。制服から部屋着に着替え、制服をハンガーに干す。

「くう——」

手にリモコンを握ったまま、伸びをしつつスイッチオン。

『——続いてのニュースです。本日三時……』

厚着をしても、少し寒い。

まあ、正月から一週間も経ってないし。寒くて当然か。

パソコンの電源を入れてから、着替えを抱いて風呂場に向かう。

タオルを巻いてパソコンの前に座る。

今は書く気が無く、無線環境が整っている場所なので、メールの確認。

再びテレビの電源を入れておく。一人は好きだけど——パソコンの音や、タイプ音など。

それ以外の音がしないのは——一人が好きでも、寂しい。

返信が必要なメールには返信。スパムは全消去。

後は——ブログの更新かあ。

基本的に、日記の代わりにブログを更新するだけだが。

思えば、ブログがきっかけで礼佳と知り合ったんだよね……。

そして、入学した高校で出会い。部活まで一緒——ついになんつーか……美少女。その一言で表せないけどやっぱり綺麗で、びっくりした——な。

こんなことが実現するなんて、確率で表したら宝くじに当たるほうが確率高いかもしれない。

今日は特になにも無く、小説を5ページほど書いて終了。明日は

土曜日だから、早めに寝て、たっぷり小説を書こう

更新終了。

後は——ブログの友人の新着を回って、寝ようか……。

早めに寝たのは正解だった——と気付くのは、明日の朝だった……。

…。

4話 そうだ、史跡に行こう！

「そうだ、史跡に行こう！ そんな訳で、出掛けましょう」

土曜の朝食の席。突然そう言い出したのは更紗。

「えっと、更紗ちゃん。いきなり、どうして……………」

箸を休め、口に含んだものを咀嚼してから、礼佳が更紗に問いかける。

「何となくですよ」

ん？ でも…………。

「史跡って言っても、どこに行くんだ？ 能都川には史跡が山のようにあるぞ。」

分類しただけで——城跡。廃寺跡。集落跡に古墳。そして軍事施設。集落跡と古墳に至ってはかなり多いぞ」

言った通り、ここ能都川には史跡が山のようにある。

山には古墳が点在し、集落跡もたくさんある。渡来人が生活していたとも。

戦国時代にはいくつかの城が存在するも、すべて織田信長に滅ぼされた——と。一説には、安土城が焼け落ちる際、能都川側に倒れてきた——とか。

朝鮮人街道が街の真ん中を通ってたし、時代が進めば、海軍の基地があつたり、戦争末期には連日のように襲撃してくるアメリカ軍爆撃機に対抗するための秘密兵器が山に築かれたりした。

「うん。それは分かってる。それでね、この記事見て」

手渡された新聞。見出し記事に大きく文が踊る。

「えっと……………なにに？ 伊庭内湖の水中にて旧帝国海軍の水上機を発見した事が昨日の会見で明らかになった。引き上げ作業は既に始まっており、本日中にも終わる見通し……………」

「それ！ 見に行こうよ！」

元気だなあ……………てか、忘れてた。更紗は根っからの——軍才

タだ。

「こんなの見る機会、めったにないよ！　しかもこれ、噂ではほぼ完全な状態なんだって！」

ふうん……。

「近藤……どう、する？」

自分はどちらでもいい。なので、最終的な判断を礼佳に求める。

「ええと、私は——どっちでもいい。かな。大和田くんが行くなら、私も行く」

微笑と共にそう言われると——。

「んじゃ、行こうか——」

「分かった！　なら、礼佳は鍵よろしく。私は先に行ってるから！」
言葉を途中で遮られ、一方的に指示した挙句、更紗は疾風の如く部屋を飛び出た。自室に飛び込んだかと思うと、即座に外出着に着替え、一眼レフが入った鞆を抱えて玄関に向かって靴を履き替え——
—玄関扉の向こうに姿を消した。

「……」

部屋に残された自分と礼佳。ただ、玄関扉を見つめるだけだった。
「……とりあえず、食べて、食器を洗ってから行こう。それくらい時間は分かってくれるだろうし」

いくらなんでも、食器を放り出して来い！　とは言わないだろう。多分。

「う、うん……そうだね」

見れば、更紗の食器は既に流しに運ばれていた。

4話 そうだ、史跡に行こう！（後書き）

この話の舞台、能都川。明確なモデルが存在します。
舞台設定に書きましたが、軍事関係以外はすべて実話。

5話 照れ隠し

マンションの外、駐輪場。

頭の中で伊庭内湖までの行程図を——アレ？

「なあ近藤。伊庭内湖のどこに行くんだった？」

「……………さあ。聞いてなかった」

——。

マンガなら、ピュ〜と擬音語が入り、落ち葉が風に飛ばされる。
そんな空気。

「え、えと。水車公園じゃないかな？ なんとなく——だけど」

「なんとなくかよ……。まあ、とりあえず水車公園に行こうか」

湖岸に沿った道に入り、後は道なりに進むだけ。

「あのさ、大和田くん——」

自分の後ろを走る礼佳が、少し大きめな声で問いかけてくる。

「さつきから、車とかいっぱい通ってるね」

「みんな目的は一緒だろ。それに——」

それに、と言った後に、運転に支障がない範囲内で空を見上げる。

「ヘリが飛んでる」

おそらくは新聞社か、テレビ局。

と言うか……こうやって見つかるのは昔からあったらしい。いつそ湖の水を琵琶湖に出して、湖底の探索でもやったらいいのに——
——無理か。出来たらやってるよな……。

「ねえ大和田くん。こうやって飛行機が見つかるなら、水を全部出して、調査したらいいと思わない？」

「まったく同じ事を考えてた」

「えっ？」

「でもな、ここから水を全部抜くことは無理に近い。伊庭内湖には能都川内全ての川が流れ込む。まあ、全ての川を琵琶湖に流すバイ

パスを作れば話は別だが——誰がその費用を出すか？　ってこと」

「……………そっか」

「ほれ、もうすぐ着くからな」

あと残り100メートルほど。手前には資料館。そして奥には関西最大級を誇る大水車。確か直径は13メートルだったか。

「うん……………」

「どうした？　近藤」

自転車を駐輪場に止め、芝生の上。礼佳は背伸びをしてキョロキョロしている。

「更紗ちゃん。どこに居るかなあって……………」

身長が150に満たないのに……………なんつか、頑張ってる言うか……………」

「更紗なら——あそこじゃない？」

指差した方向。と言っても、指差した方向にはもう姿はなく、他の場所へカメラを持って走り去った。

「え？　いない、けど……………」

「あ……………まあ、更紗の事だ。今は周りの事は見えてないと思うし、放っておくのが一番だ」

「あ、うん……………そうだね」

口調から察するに、礼佳も更紗に振り回されたことがあるのだろう。

そう言っている自分も、空自の航空祭に連れて行かれ、更紗は突っ走り、拳句の果てにはぐれた。まあ、帰りに合流できたから良かったのだが……………」

「とりあえず——ほれ。お茶で良かったな」

資料館の休憩室。自販機で買ってきたペットボトルのお茶を礼佳に手渡す。

「え、えっと……ありがとう」

礼佳の笑顔。何度も、何度も見ているけど――。

「け、携帯もあるし、更紗に呼ばれたら、行こうか」

「うん！」

照れ隠し、とは礼佳は気付いていないのか。

気付いていないなら、それでいいけど――――若干の寂しさも、感じる。

6話 想いは重い。

「ホント、今日はいいい日だったね！」

近藤家にて。更紗が向かい側のソファーに座る

……。どの口が言ってたんだか。

結局あの後、調子に乗った更紗は和田山の高射砲跡まで自分たちを連れていった。

あ、そうそう。湖から引き上げられた水上機は 二式水上戦闘機と言っらしい。

更紗の発言を借りて説明すると。

『二式水戦は名機ゼロ戦を水上戦闘機に改造したもので、ゼロ戦の優秀さを引き継ぎ、強力な武装と軽快な運動性能を持ち合わせた無類の水上戦闘機なんだよ！』

だそうだ。

確かに、見れたことは良かった。が、しかし。

「……………すう」

自分に寄りかかって眠る礼佳——つまり、疲れた。

自分も眠りたいが——今ここで寝てしまうのは、何と言っかもったいないと言っか……。

「希——ちよつといい？」

「あ？」

更紗に呼ばれて俯き気味だった顔を上げ、返事する。

「希——……………礼佳をどう想っているの？」

ニユアンスが……………違う。

思い——じゃなくて、想い。

でも……………。

「分からない……………」

「……………」

更紗は沈黙のまま。

「微笑まれたときとか、今も———凄いドキドキしてる。けど……それが好きなのか、分からない」

「……今はまだ、分からない？」

「それに、礼佳がどう想ってるか、分からないし……。もし、好きじゃなかったら——」

「どうして、好きじゃなかったら——って考えるの？」

「それは……今の関係を崩したくない。それを一番に思っている。だから――」

「どうして、今、間が空いたんでしょうね——それに、言っていることが変わっていますよ？ まあ、別にいいです……。今の希望には重すぎるみたいだし」

はあ……。と、溜息をつく更紗。

○

間違った事を言っただけではない。

自分は、
いたい……。――

「——好きでもない相手に、寄りかかって眠りませんよ……例え礼佳が天然であっても」

更紗の弦きは、聞こえなかった。

7話 同じ質問

「礼佳は……………希一をどう想っているの？」

希一に言ったのと同じことを、礼佳に尋ねる。

当然だが、ここに希一はいない。時計は深夜一時を差す。

自分はいつもこの時間まで起きているし、礼佳は夕方寝ていたせいで、起きたようだ。

「わ、私は……………」

数秒も経たず、礼佳の頬は真っ赤に染まる。

それだけで、分かる。礼佳が希一を好いている事を…………。

「やっぱり言わないでいいです……………」

「そ、そう？」

希一は、何に怖がっているのだろうか…………。

「じゃあ、更紗ちゃんは大和田くんの事、どう想ってるの？」

真剣な——目。

自分が発する一言で礼佳の敵になれるし、味方にもなれる。

「私にとって希一は、友人止まりですよ。安心してください」
嘘では、なかった。

意識した事がない——と言えば嘘になるが。

見れば、礼佳は安堵の表情を浮かべている。

礼佳は、もっとアプローチしたほうが良いのではないか。

そうすれば、きっと希一も分かってくれと……………。

まあ、それを決めるのは礼佳本人ですからね。

私は———そうですね、高みの見物としましょうか。

お互いに想っていても、お互いに気付かない———。

8話 失いたくない。

やることは全部やった。

ブログも更新したし、風呂にも入った。歯も磨いた。
後は寝るだけ——ん？

携帯が机の上で振動している。マナーモードに……してたか。礼
佳が寝てたから。

画面を見て確認——電話か。

「はい、もしもし？」

『あー、俺だ室谷だ』

「こんな時間に何の用だ？ もう寝ようとしてたんだが」
『まあ、そう言うな。聞きたい事聞いたら、すぐ終わる』
「あーそうですか。じゃあ早く言えよ」

……こうしている間にも、瞼は仲良く——。

『近藤礼佳は、誰かと付き合っているのか？』

「はい？」

今、確かに室谷は 近藤礼佳は、誰かと付き合っているのか？
と聞いてきた。

『いや、ちよつと知り合いに聞かれてな』

「——誰とも、付き合っていない」

『そうか。すまん、こんな時間に。じゃー！』

一方的に電話は切られ。

嘘——だよな？ 嘘であってほしい。

ベッドに倒れこみ、天井を見上げる。

………待て。

なんで自分が、干渉する？

選ぶのは礼佳だろ……選ぶ？ 誰を……。自分が入っている前提
なのか……？

……。

失いたくない。

そう、ハッキリと確信した。

礼佳を――。

9話 礼佳の決意

眠くなるまでの間——と開いていた小説を閉じる。

私は——もっと積極的にならないといけない？ そう更紗ちゃんに尋ねた。

更紗ちゃんは——礼佳が決めること。

そうしたければ、そうしたらいい。と返したけど……。

大和田くんは、気付いてほしい。

私が、大和田くんを好いている事。

そう思ってるだけじゃ、だめなのに——。

……。

大和田くんには、好きな人がいるかも知れない。

それでも——私が振り向かせないと。

私が、やるんだ——。

どこにも行ってほしくない。

自分の隣に居てほしい。

自分だけを見ていてほしい。

だから、私はやってやる。

誰よりも、私は、大和田くんを好いているから——。

10話

明日からの少し特別な日常

こうして。

失いたくない。と、気付いた少年と。

振り向かせて見せる。と、決意を新たにした少女。
行き違いから生まれた強い思い。

きっと礼佳は強くなって、それに希一が振り回されるのでしょうか？

それとも—— 案外早く決着がつくかもしれませんね。

希一はきつと気付く筈。

どうして、礼佳が強くなったのか。

そして、自分の想いに……。

私は—— そうですね。

こんな絵にかいたような話、漫画にさせてもらいましょうか……。

さて—— 明日から始まる、少し特別な日常。

…… 楽しみですね。

1話 少し特別な日々の始まり。

日常。

日が常と書く。同じ状況が、その日も変わらない――。

なら、今の状況は非日常なのか？

自分の腕に、腕を絡める礼佳。

頬どころか、顔全体を真っ赤にして――。

「あの……………近藤？」

「――礼佳って呼んでくれたら、離れる……………」

……………。

礼佳、と呼ばば離れてくれる。

でも、離れてしまう――。

どちらかと言えば……………。

「じゃ、じゃあ。礼佳、離れてくれないか？」

「ヤダ」

……………。

釣られた――と思いつつ、ほんの少しの嬉しさ。

後ろでニヤニヤしている更紗は放っておいて……………。

この辺りにはまだ通学中の生徒はいないが――。

見られたら、さすがにまずいだろなあ……………。

「と言うことで――流石に離れてくれないか？」

「……………分かった」

顔を真っ赤にしたまま、少し残念そうな顔をして離れる礼佳。
そうこうしている間にも、学校に到着。

今日から、少し特別な日々が始まった――そんな気が、した。

2話 告白？

何かと。

疲れる日でした——と

ブログの更新完了。

何かと——。

礼佳が、何と言っか——。

甘えてくると言っか……………。

嬉しい、けどさ。

学校内でやるのは——ちょっと……………ねえ。

あ、だからと言って、学校の外ならやってもいい——って事じゃ
くて……………。

誰に弁明しているんだ？ 自分は。

「礼佳——がんばりすぎです」

「……………だよねえ」

と、更紗ちゃんに反しつつ——自分が今日やってきた事を思い出
す。

……………。

「顔、すごい赤いですよ——礼佳」

自分でも分かるくらい——頬が熱を持って……………うん。赤いん
だろうね。

でも。

やると決めたんだから——。

「あんなにするなら——いつそ、告白のほぅが早くないですか

「？」

「へっ？　こゝ、告白……………」

いや、それは——ちょっと……………早すぎるというか。

「……………それくらい、覚悟しなくちゃいけないでしょ？」

「あ——うん。そうだね」

いつかは——やらなくちゃ。

告白——と礼佳に言っただけ。

今すぐになでも問題ない——と私は思う。

第一に、希一には断る理由がない。

それに——もし、もし断ったとしても。

希一は女性を、泣かせて帰すような人ではない。そう信じていますから。

3話 一人しか知らないキス

書いた文章を保存し、ウィンドウを閉じる。

土曜の朝、一度近藤家に顔を出し、その後はずっと籠っていた。そして現在。日曜の朝である。

正直……最悪な食生活だったな――。

飲み物はインスタントのコーヒー。食べたのは――お菓子。それと総菜パン……。

まあ、その分進んだからいいか。

とりあえず――。

寝ようか。

明日は学校。

おやすみなさーい……。

えっと……。

呼ばないで――って言われたのは、土曜日だけ。

だから、今日は行っても大丈夫――と、思うけど……。

「お邪魔します」……」

物音一つしない。

いない――って事はないよね？ まだ八時だから……。

リビングには――居ない。

台所にも居ない。

トイレも――ノックしてみたけど反応なし。

……。

って事は――自分の部屋……だよな？

一人で入るのは、初めて……だね。

芳香剤の匂いと——ほんの少し、大和田さんの匂い。

そして大和田くんは……ベッドで、羽毛布団に包まって寝ていた

。

何と言つか——私の決意を返してほしい。そんな気がした。

でも……………。

誰も、見ていない——。

「ごめん、なさい——」

どうしてそう言ったのか分からない。

でも、呟くと同時。

少し乾いていた唇をそつと濡らし、大和田くんを起こさないよう

——そつと。

私は、大和田君の頬に、キスをした——。

4話 知らない人間

う……ん。なんだろうか。

とても良い夢を見ていた気がする。

——アレ？

窓の外を見やって疑問一つ。

あかね色に染まる空——このあかね色は……夕日？ それとも朝日？

……。

テレビをつけよう。

『おはようございます——』

朝でしたか。

まあいいか。とりあえずコーヒーを淹れよう。

部屋に充満するコーヒーの香り。

うん……イイね！

さて……朝食だが、どうしようか。

パンの買い置きはない。

ご飯は当然炊いていない——残っている事に希望を託そう。

「……………あれ？」

自分の持ち物ではない皿。四つのお握りが乗ってて、ラップがしてあった。

『礼佳に頼まれた。以上』

達筆な字で更紗のメモが挟んであった。

貰える以上、きちんと貰いましょう。

後で皿を洗って返しに行くか——。

5話 心構え

玄関扉が開く音。

来た……………。

どんな顔でいたらいい？

更紗ちゃんを頼ることはできないし。

と言うか、誰にも言えないよ……………。

徐々に、近づいてくる大和田くんの足音。

どうすれば……………。

そうだ、本を読んでいれば……………。

手近にあった本をひつつかみ、適当に開いて読んでいるフリをする。

廊下からリビングへのドア、ドアノブを掴み、ドアが開かれる――。

「ん？ 朝早くから本を読むなんて珍しいな」

……………アレ？ 新聞、取りに行ってたんだ……………。

手に新聞を持った更紗、ちゃん……………。

「……………さては礼佳。希一と勘違いしたな？」

ニヤリ、と意味深な笑みを浮かべる更紗ちゃん。

察知されてるし……………。

「いや、別に――その。あれで……………」

「よっす」

ふえ！？

「皿返しに来たぞ……………どうした？ 近藤」

物音一つなく……………。いや、気付いてなかったのかもしれない。

もしかして、更紗ちゃんの笑みはこの伏線？

「あー。別にいいの。皿、洗ってある？」

「そ……………つか。ああ、皿ならきちんと洗ってあるけど？」

更紗ちゃんが大和田くんを誘導する。

私も、更紗ちゃんみたいに、話せたら……。
あう……。

6話 待つ男

なんだか……今日は礼佳がおかしい——。

まず、目が合わない。

合ったとしても、すぐ逸らされる。

……なんか悪いことしたっけ？

思えば思うほど、気付かぬ間に粗相を——と思ってしまう。

……うん。謝ろう。

一方的に無視されているなら、礼佳に非があるとは考えにくい。
でも、どこで謝る？

教室——絶対無理。

部室——来なかったらどうする？

じゃあ、家——か？

よし、決めた。

部室に来なかったら、家で。

時は過ぎて放課後。

……。
普段通り、キーボードに指を走らせる。

……。
来ない。まあ、放課後になってまだ十分だからな。

……。
三十分。

来ない、のか……。
更紗まで来ないとなると、逆に何かあったのか。

……。
ふと、手を止める。

部室——。

普段でもたった三人だけで、十分広く感じる筈なのに。

一人だと何故か——余計に、広く感じる。

寂しさと——小さな胸の痛み。

その痛みはきつと。

傍に居てほしい人が、居ないから……………。

7話 忘れ物に奪われた決意。

遅れたあ……。

部活の時間になって、もう三十分以上経ってるし……。

まあ、授業中に読んで没収された本を取り返しに行ったただけだ。

教師を説き伏せるのに時間が掛かり過ぎた——か。

今までのをまとめて——だからかなあ？

総冊数……二十。

今日は更紗ちゃん来ないみたいだから——。

ちよつと待って……じゃあ、大和田くん一人？

いや、二人きり……とか以前に、三十分も一人で？

急いだほうがいい……けど、二人きりだから……。

よし。

極力、急ごう！

……。

なんで、こう思ったのか考え直す。

高校入学からもうすぐ一年。

部活に入ってから、自分の向い側にはいつも、礼佳が居た。

それが、普通だった。

——この、胸にぽっかりと空いた穴。

礼佳に、そこに居てほしい。

強く願う故に涙が溢れそうになる。

「お、遅れまし……た」

部室の戸を開いて、飛び込んできた光景。

初めて、大和田くんの涙を見た――。

「あ、おお。遅かったな」

「あ――うん、ごめん」

強さ。間違いなく、強さと呼べる。

一瞬で普段の顔に戻っている。

「ごめん、ね。没収されてた本を取り返しに――」

「――寂し、かった」

「え？」

その一言を、私は、聞き逃さなかった。

「やっと気付いた……自分には、礼佳が――」

これって、告白？

「わ、わ、忘れっものっ」と

……どこかで聞いたようなフレーズと共に、部室に入ってくる更紗ちゃん。

……。

凍る空気。

「……邪魔だったね」

踵を返し、部室から走り去る更紗。

「邪魔じゃないって！」

更紗を追いかけて、部室から消える礼佳。

……今の決意を返して下さい。

7話 忘れ物に奪われた決意。(後書き)

すみません。なんか、すみません……。。

8話 想い、通じて

ごろん——と、ベッドに寝転がる。

更紗は『今度、何か奢るからそれで手打ちって事で』と言った。
よし。

ペンタブでも奢ってもらおうか——って常識的に考えてダメだな……。

まあ。これからチャンスはあるだろう——きつと。
と言うか……感情に流されるままじゃなかったか？ 今日。
良いのか悪いのか——。
明日になったら……きつと、良い考えが……。

「……くん………て」

………あ？

意識が覚醒していくと同時に。腹部に感じる圧迫感。
金縛り？ 今は冬だぞ……。

「大和田くん、起きて」

「れ、礼佳？」

圧迫感——と言うか、重さ。

それは——礼佳の体重だった。と言うか、これを重いとは言わないだろ。

時計に目をやると、今は深夜三時。

「え、えつと……こんな夜遅くに、何用でしょうか？」

「ぎゃ、逆夜這い——」

え？ 今、夜這いと言いましたか……？

「——冗談だけど」

冗談か……良かった——あれ？ 喜ぶべき？ 悲しむべき？

「きよ、今日……言おうとした事——今、ここで言って分かつている筈。言いたかった事を、礼佳も。」

「教えて。今、ここで」

めったに見ることがない、鋭く、強い意志を持った目。

……。

「要約して、いいか？」

「うん……いいよ」

ここで、今の日常を失っても。

自分の意思を貫いて、失うなら——。

「礼佳——好きだ」

礼佳の体が、一瞬——痙攣したように震えて……。

「ほ、ホントに？」

そう、自分に問うと同時に、力強く頷いて見せる。

礼佳の目から、大粒の涙が次から次に零れて——。

「あ、あれ？ 嬉しいのに……涙が、止まらないよお……」

伸ばせる最大限まで腕を伸ばす。少し、ぎこちない動作で礼佳の

涙をそっと、拭う。

「私も……。大好き、だよっ！」

止める間もなく、体を前に倒して抱きついてくる礼佳。

熱い抱擁——と言う表現の意味を、身を持って分かった……。

そんな気が、するほど強く抱きしめられて——。

「ごめんなさい……」

「え……？」

どの意味でのごめんなさい？

「少し前に。寝ている大和田くんの頬に、キス……しました」

え……？

「だ、だから——こ、今度は……口にしても、いいですか？」

ここで、ダメ。って言う人はどうかしていると思う。

頬を真紅に染め、眼を潤ませて……。

だから。

今度は、自分からやってやる——と、胸の中で呟いて……。首から上だけを持ち上げると同時、礼佳の頭に手を回して——

「っ……………！」

虚を突かれたと言わんばかりに、目を見開く礼佳。

その少し後、幸せそうな顔に変わり眼を閉じるのを見届けて、自分も眼を閉じる。

ほんの少しの優越感と、なんだろうか——一言で言い表すなら、幸せを感じて。

勇気が少し足らなくて、唇と唇を重ねるだけ。

それでも、唇が離れた後、礼佳は言ってくれた。

「希くん——大好きだよ……」

む？ 後日談か……よし、なら私が

それから——を、私が語ろう。

あれから、もう四年が過ぎた。

高校一年生だった私たち三人は、高校を卒業し、私は就職。

あの二人は、隣町にある大学へ進学した。

そうそう……。

希一は応募した作品で審査員特別賞を受賞し、一部で時の人となった。

インタビューで、感謝したい人——って出た時、親と一緒に私たちを出してくれたのが、嬉しかったなあ……。

まあ今の希一は——少し無理をしているようにも見えますがね。

大学に行き、バイトをして、小説を書く。

親からの仕送りがあるとは聞いてますが——。

稼いでも、大半が礼佳の本に消える——と嘆いていましたね。

でも——。

礼佳が笑っているなら、それでいい——と。

希一らしくないセリフですが、礼佳は幸せ者ですね。

そして、その礼佳は——この部屋に居ない。

いつの間にか、希一の部屋で暮らしている。

これって同棲じゃ——まあ、いいですか。

私は——地元の洋菓子店に努めつつ、今も夢を追っている。

その一方『内湖に沈む兵器を保存する会』にも参加していたり……。

……
だつて——ねえ。

さて、マンションが見えてきました。

今日も、幸せな二人を、茶化しに行きましょうか——。

夢を叶えた作家志望と、ギリギリ少女な文学少女を。

む？ 後日談か……よし、なら私が（後書き）

これにて、終わり——って事で。

足りない分は脳内補完でよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9370p/>

作家志望と文学少女

2011年8月17日03時24分発行